麥林集

中

へ 5
4426
2

麦林集巻三

穐部

初秋

秋もはや肥は浮葉の色かはる

秋立や風はそよ萩ばかり哉

高久山は千とせのは何と鶴の秋

門 へ 5
䨏 4426
巻 2

昭和九年九月二九日
購求

凄き月に萩吹ゆらしら鋤の秋

秋きぬと目にみえなる桐の一葉かな

鋸ひりや蔵もその詞に作

秋きぬと宗によみたる古法

七夕

月ハ入星ハさしつゝ宵の月

明ぐきはしあや星わかれおもふ

星合や織の夜まちかし

離れその如腫やけしから

あのかされあたるをわる女七夕

離れや三つ四つ二つ橋かけよ

劔気に承稲らけしひん女七夕

干風のあさへわくり星迠

柳水に殺はかしら星乃燕

尾星も嘉なる道や牛車

七夕にかしく裸や弁婦人
立聖に一系れさるを聖は
秋風も手洗ひ扇引し誘の信
傾城のそれを何も一天河
七夕に寸ふ只旁引し星を知ふ
夕風や浮木も萩を一天河
立聖りや秋河楽の作るつき
まし聖に風も宿み御酒つぶ

星合や枝を崩しく明ヶ鳥
天の河積の本やも積んひ
星合の濱おまへ雅や亭も詩も
星合や鶴頂を肩に乗のきれ

魂祭

捨子に他人も手や魂祭
蓮池を懐にかららふれは

そきの香を宿に運ぶや魂祭
不拍子に誦経まゐり施り
小車の嗚や落しても玉まつり
空の秋それもかなしし玉まつり
同じうえぬとのいそし玉祭
唐の為小家からなり玉祭
年れ好もちらつくし母祭
二月八二日もやくしに是之日

秋と云蛙狂ひ死き魂祭
娘の供に琢く是福なや玉祭

八朔

八朔やむかりの是とかしこ命
錦にも酒の是らぬいなりけり
肴衣の帳地ひらくみ紛れ侍る

待宵

待宵に鷺行やわたしふね
まつ宵のひかりや翌はれ代様さ
枝待し月の名を帰と宵かれ
待宵りや立ほそしる峯の松

名月

やゝく須磨山をはなるゝやくもれ月

名月や押倉乾らむ六寺仏
蕗さ家と白眼やまかりくるの月
秋なれも名付くそふの月
栗褌の見何よくふす草むれ月
名月や杉を落ても荊れよ
名月やいかるの山を照とても
名月や須磨この名はれ消にし
名月や薄まくあれ絵え法

○越中

名月や雅文れ庵の柳うらん
こよ宵行月ハ濁さし一口
名月や桜の陰も惜まれし
三味線三弦ハ抓らんすゝ名月
孫三の葬さへ見えぬくまな名月
三理ともりよふハ京染させて月見んし
下手れ漕船も又まゝりよふ名月
名月や又く弥陀の名れ聖

名月や芋堀坊も僧一山も
名月や室負頭負し蔵根
くふの月かさふくもれ二階から
縁つき木の陰ハ麻一しまゝ名月
名月や岩戸の客も面白し
秋をゝれ薪ハさひしき月見んし
吉時かゑまいまゑやゑゑの月
芋喰つくして細くも月見んし

○紫淵

名月やかなに細工人ちかき

水晶に芋はこふや月の影

名月や雲ゐもなき伽羅もの
鶴然村にて

翌日の秋ハ文をさ山や里の月
病中作

名月やきはゝ淡路秋見の山
病後作

名月やふハ七歩の床をもれ
蓮臺寺の里にて招れて

月のよる刈てや早稲も一畝町

十六ゝ秋

十六夜や赤山の寒さひ人に照

十六夜や引水の足は濁りは背

月ふハ又二八かさんの月見ゑ

十六夜の空の月や惜む行

庵

庵の月は庵主山は所さたし
庵は我心に角はなかりけり
庵の戸は何れ斗にも角はなし
月かけは庭前の月や秋の庵
草呂の庭も淋し 庵の月

庵の月やむかしく庵に住
花かやや庵の露には大海
風のすれ引のよりり萩の月
はかれ角は庭にや 庵か籬
多の声れ杉さひしや庵の松
庵の月や東山に枕も無のまて

重陽

菊に於ても頬赤や九月の菊
ハ菊もてふの九日の白きもれ
よの人の句はまなかや菊のなを
頭らさる足れも菊の山様に
菊細へ翁やさゑ侍る
作と今ハ元人作にも有菊白扇
信心も深くに究まうらきしき
様有也

菊のかれ甘露を揚る様の便
病後也
菊の月の児ニ置ろや永天宮
十三夜
遊人に行燈月や大悲閣
晩も明も但ゑ当らし様の月
詩歌にも界玉まさる今宵月

豆からハ木に絡るゝ九月見に

題山

隣子田をかゝへて照や下ゝ秋

題海

龍宮の姫ハ浅つき下ゝ夜

閑居

芒一把他の蒲團や秋明月

穐 以下不分題

蚊帳ニ入住良くもし居乃哥

初居や一歩て帰く文字よう実

世の中九頭ハ姓しても秋

もえ日に眼わくゝる行ゝり風

題 庭前誦

こゝろあるさま　風の女郎花
秋も深き眠みゆる思ふかな
入相に何となくみれ木槿かな

途中吟

時雨にハ米かうこともなし菜もなし
星横に風の棲機ふ雅かな
暮てよれ时借さき竜雅かな
朝貞やなのあらハ白きると

月後律庵を訪ふ

菜の須ゝ花なり行打戸
　　経有と屈く
菊にかん経在辰取キやう
　　菊其堂李淑酒
菊の実もこれにかゝや淵の名
きりくなあるの声ひとみしかひと
雲の間をさしけりける鶴かな

角と布袋のやうにはつしやれ多
館の名れ乞へ清しく火鏡が
冬蛍も恆仕去に地から雨
雨京聡にあまうり角力草
浅深のわらけるあや川の諸
名まやりの世より此羽子
夢路か花ハ何不の稲れを
女身仰も聡命の姿比こせく

蓍娘 拾もう露か夕日此亂法師
住く〳〵子も假鏡や稲の本
消金に豚なき魚の寒山子じ
秋かけく西京衣の寒山子乱
高き鏡に泥氷ハ濡しく寂山子が
明子動きもか至き豚子雑うきね
きも鏡子程雲にうけを笋れを
朝無嶽子しく

山終日なく菜にも向ふや峯の雲
甘菜の名に体そ女郎花

放生會

山雀や飛込まとく杖を登る
葉月の参卿もか涼し男山
一ノ鳥居を通く
端山の梢のもとを見にゆ
涸れの萱をへしなるに

竹川の流もよし村紅葉
積れ田まに荒れ紅葉が那

何木か庭に紅葉を拾ひしハ
弁の紅に名を分くや秋紅葉

菩提山にて

林間に仁王も酌しくもみぢ
紅葉ふりし樹ならしや菩提山
深きのとも洗はれに様の神

古戦場にて
殺されし杉も立より茂りつゝ
旭の木に掛て隣人茂りけり
風来寺山中にて
赤の実は落て見るや秋の水
一ノ瀬にて
一の瀬もとは我瀬て秋はなし
加賀山中温泉にて

仙人にあたる湯入の声は露
見えつ給ふ隣もなし形役
初秋吟
寂しさは門に入かゝる三ケの月
文月六日吟
翌日は待形のきのふや星は秋
題米守
百は待こそ雀やおとし哉

山田氏何某のもとにて
茶の花にまよふや隠院の垂示
深泊の雅さに聞えく
書生の羽根も休めん流る舟
一ノ流にやうく
蒼鮎の一秋肥えりその泊
稀行還に移れしく
永い時鈴に紫かし　李北翠

坂氏に暇乞しく
路の霧に舗れぬうの居ちかう
見送れ苦しく
蛙帰れ眩の深さに佐且
午潮うれ移れしく
世れ名れ夷路ハ一同し菊のむ
菓店に宿しく
秋さにも風むれ宿れ自れじう

なな士らうに於れく
菓子皇に秋とさ？ねさう於
移まゐらせてく
まうかくる葉に又皆秋の体
しかかふらう
葉桂夜一間くれ句にうれ
庵所の曲中に？しく
その国も名も隣や友なう

わか百化氏に杖を休く
此ハ海と志うぬ屏風の？そ？うれ
一茶庵よしく
言海よふ芸も化かれ房う卵
百化氏の？壁よしく
秋涼し？よ綸の句れの？なう
？兆法師が葉を縫しよ
この葉にも秋雲や？うん秋のれ

坂氏より

松うしく草よりさきあらしかな

山田氏の本望より

秋ハあれ伊吹よ首く荻漢山

江尻の何某に訪ひし

汐端よ路間の原や二人とを

雪仏文志よ到しく

まよ論をおと望れ句れや東風尾張

外の上曲よ訪ひし

夏の空れ草いくきや旅すると

東武貝園よ到しく

日暮ものこしくよめをと草れも

信見連化か俳諧の先覚と称し

さみりきハ月の草れ句れば

畔去こうまし

月隠の無れ言や一枕

雪伽ゝふる芦のまろ屋に記ならく
露も払ひ人も踏ふや芦のむひ
出雨もより涙ともへ成一袖に
気乃せまり草を乞らく
ふりつもる言葉のかゝや秋の山
氷人の腰刀をこ破れ寄仙見と
袖よしくこゝの月に表せ
れ写に銀を敵く

見よ照まに破かり月とこしへら
れ様ならまく
常盤木も律の拍子やあかり座
未かなならまく
打ちし眠によ人ハ玉まふ　鮮
一ゑ歌の弁こ唐のかり藤に饒会
のこせるまし叶葉月の比なり
りうこしハ哉秋法師とふされ
くゑれ財を序れ奥と打りよ

吟のわんにうたより他体俳じ
棄名永春院よりる
萱ハなきになりたり梅か枝
右様なまやつくく
初鹿の音とまなく操秋くれ
秋風や空ま捨ふ音信見
何をなりまし
揺へしく落も揺くや庭の秋

かゞ氏のかくわえつれた皆
そよなとえ私部の秋よ
稲干けしらす白んといと
同じ様りけしハ稲葉ぶしらまさ
ふかき一し
恋のみよハわりつ稲てしむ
ハナの薄れ且きの助り
ま操あそこさそえ浮とえく
立居ともかくえ咲まと庭の菊
桜庭某秋法師ハよれ十房語

のなとうたしく萩原の里には
竹笠をうむ一休の尼寺侍る
もそこの人これ助力すれや
されは園位上人の世の中
見ハふしをかんといふれ
も今しし此秋のうつらは

いうけや萩ちるのとてもつくし世来
此のたまの俳名わするとて
あきて

なかりの枝もあやしの花の酒
保る小野の鳴ても秋萩の宿
そのいたは人揉よりけ秋の首
秋の花をまてれつりつ清き槿の音
はうかや秋は扇にふせられ
不雀の名よろしく
山花の色うつりなける捨は表り

暮秋

行秋の道しく古ほをあらふ人は
猶く来る猶く行秋そ
行く秋や別路なかもとの也
行秋の尾をとらへてや蔦かつら
虫の音の猶詠く絶てかしく紫
深様は心はなさく秋晨暮
やゝく鮫喰すて行うへし秋の暮

秋の暮猪垣の声もなけく行

九月盡

丹ハ庭もゑくれ秋暮ぬ

九月晦日雨降けれハ

頃ま盡まてや雨は秋送

早稲田大学図書

麥林集巻四

冬之部

十夜

小坊主れ伯父に参るゝ十夜かな

祖父祖母の京にも多き十夜かな

翁てハ主従共の十夜一外

蓮池ハ根でねつくて秋の花
空唐楼もおもしてまて絶ハ
嵐ハうれしさく十夜の綿帽子

時雨

上日本の清水寺ん初しくれ
牛の子も鼻声さふく時雨ハ
杦えみしき里も仏や初時雨

あれ寒れ何しく晴れ初しくれ
本堂の扉やうとてハ時雨かれ
神儀かわふく待らし時雨かな
松ハ家の篠さしハ何ハ初しくれ
紫陽花うちハ雲なつ池面かな
便ハ御扉さしへの道や初時雨
霧草よの顔もこまや初しくれ
定めく双紙読やうたゝ時夜

千鳥

船舟の讃もまよふちとりかな
啼れやよるも川の両かは
鳴つゝ来る鳥にあるれ千鳥か
星の秋れ梨地に啼や村千鳥
小信ましく
立ちゐては又杉か淵川千鳥

雪

初雪や雨と拝みぬ霰ちらし
畠の雪枯ゆくや小鶴の雪
菅笠ハ雪の詠や鬼れ雪
風のまれ砕る果はや赤の雪
大浪よく
雪つみより帆は世を翁か嶽

霜月またも明し宿の汐干哉 ふう

なつかし海髪や汐干のむしきお

月影に乾くさし 標流

笠取くみは取れ汐干な

晴までは火縄へかくれ汐干乱

影所く月の漁村れ汐干な

臘八

臘八や浪の菊も山をおれ

臘八や梅も眼れゐうき 初

埋火や暁見さ八里志ら 几

臘八や軍書でさへ殺生磨 嬰

臘八や猫の夜狩は時外 衣

冬　以下不分題

木兎の目たゝきしけき落葉哉　以
取りしれ雲にちりくる落葉哉　舟
板よハうすくへ人さきと落葉哉　以
木枯や落葉ハゆるさぬ家　晨雪
かへまふ白の顔にそうらこえ　かすね
秋風を吹よせ路しく帰り花

返花よ温気ハ取りて　懐よ
又人洗よ下三本や大根引
縁とうれ秋ふかさよを大根引
才方に置れ有しあり大根らき
左及ぶ葉や一歌ハ文句の風
雯荷ハ女もさ取り綱ましれ
枯芦よ出や消し池の野
達ニ尺乏や掃子にさする蠟燭もし

ほたるに宿ハおりつゝ枯野かな
のみしらみ八月火燵にあたる扇かな
うかれ女ハ見とがめられ火燵かな
むらさきの雲を待つや水仙花
ふところに猪よしくり言かゝ
蛇の抜けがら月秋の桐代守
粥腹もおはしくむりし法さき
秋なれば山角振るや糸なき宮

長きれ玉石拾ふきはれゝかな
木のもとにやはりへ生雨晴かな
ふ種さ情に清しや老もれ肌
桃よりもかろき豆腐や長き白粥
浅田又狩とん伽わり長き古より
啼かうも濱の長禰や長き白龍
言葉ハ宮を厳しく渡よかり
冬れ尾の御きや冬もかな

寒月 白兎を題に探く

白兎や一頃節く雨晨中し

春ふ寄る土戸も吹草尓久艸

冬の月白し豆腐に梅の花

冬れ秋の畢や落ちん梅乃ふ

山寺にて

仮庵に咲分さかり冬れ梅

冬枯を散かり紛ふ冬 赤梅

扇枝吹

鼓玉り多様そ凡や一呂れ声

幸徳の落葉

落葉ふしくも又館者札故有

題 修羅

水仙に寄ら添く草かすり久栄

畜生

鶏の忘れてハ嵩雪殻 久艸

〇茶道の新宅を賀して

東よまて尾鰭のちゝや夏須謙

よく好女はおかしく

水仙やまのまさりし奴月のむ紫

隠れよも四かゝ奴郭や文杜丹

夜來の入庵の时

世の中のかゝる覗き蕉　敬

東葉のかゝより年の花ん

百は隠居はしく〇の家けれど

やよいしるゑし

初しれ尾よりる百もかなりきり

宿の朝宗人をおく

家れ似我と鳴郭や寄れ朝

兎士なりよく

春い龍枝一福然し　庵わ示

越の人はおかしく

然れハ女の御代もさたまりて十訖川
仲麻呂か野心を思ひぬれは
野の羽を借してかもやすの橋
道鏡か可笑しき譏りて時
御よりとちらの心も見えてくさ
しまるに頼りぬれは
重屋に乾く時日のやとりうれ
又条坊三遷するに

白壁によりて孫得なり初しと孫
桓武代に頼りぬれは
おはしの志あり加賊やそれ時日
越の至朋に助日時を續けて
時日如しといふ名甲斐われ二つ見える
そしめて春宮の宗君を遂ひ
そのうち波へよこせの人より
高きに見えしぬるも松して

垣ぞ東宮ふりて見れは只杜丹

昇龍の土産と聞えし時
茶つりしらん庵の落葉哉(?)
洲の白根世と云下といふ所(?)
於熊殿前の若總寺の(?)
男女ちよ[illegible]と傳へし(?)
小原女に化粧は夏し 紙衣 雪(?)

歳暮

瓢箪のうき無なき師走かな(?)
麦(?)男に[illegible]とられし(?)
春(?)傍は当てにしたし年の暮(?)
年の尾にあらむやらん 数(?)

根深一把よりて重ぞ売出しけり
夕顔の庭には何を昼しける市
鳥ぞなき陰なれども年の市

四季庵の主に
春夏秋冬面白し主志
年ふりし北窓に綠を掃きけり
綠掃やまとしきも華ゆれ秋
歯桑桜火鉢の中にとし　如覧

病後吟
春一統道なかんきちやとしれ候
紙衣にてくふんしく居や年不の衣砧
よき身の鐘橋に枕ふく
候なはよし姫を呼病二階ふれ
恋しききよりまの宝ぞ
浅けよ拜む大黒頭巾ともるん
打しきゑのこ紙にゆき
春の鳥ぞ中ぬも流し此頭巾

○發句

餅ハ軒のかさりにもとる年の花
菜の飯とハ百姓家ことを下されし
至薦むかしの菜まつるもの此飯
ならし此事鉢然の嶽の志げ露ちけり
此経ハ孔令とやいふらん
乳粥も百の行者や露し　淡路
雨中此師をよ空しく夜はり雁
見し此月も志らしく彩る也や庭あさき

稲言や餅ハ市ものゝつゝいとまれ
太皇の日なきかられや綵掛
す掃やいるも啼　萩此草
梅香や師走の雪も力あり
雨もなく餅も搗れず行
見れば外しく去年侍のと
曙見しや霜の梅麿とし　京
一よ儀薦も峰ふくくし　佐木翁

○冬の部

年内立春

梅か香に一寒切ルやこし晨うち

佐保姫の若やいてなりまの内

春風呂に去年を流くや年の内

見られうちに白の色まや梅の花

春まつや去れ来れハ後に多き白梅

鶯も一宿旅りのこしおくらう

再